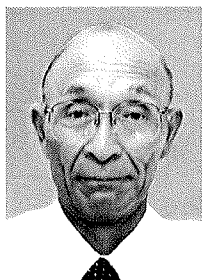


： 卷 頭 言 ：



「除草剤は我が家の水田の救世主」

宇都宮大学名誉教授 竹内安智

私は子供の頃、毎日のように田んぼの手伝いをしました。新潟県の山間地での思い出です。上杉謙信の出城、直峰城があった城山の中腹で、先祖は代々、雪解け水を使いながら僅かばかりの棚田を耕して来ました。鋤床層の下に木を埋め込んだところもある湿田でした。人が入ると田植えができない「こでまち」という小さな水田もありました。早春には雪の上を、そりを使って「べと引き」(客土)をし、さらに堆肥も入れました。4～5月には全身泥まみれになって三本鍬で稲株を一株、一株起こしました。6月は代掻きと田植えです。代掻きでは脚が長いからと煽てられて「牛の鼻とり」(案内役)をしましたが、牛に追われ続けて日が傾く頃には体がふらついていました。田植えから出穂まで酷暑の中、時には4番、5番除草もしました。8月のお盆までには水田の畔(くろ)刈りをバリカンを入れたごとく、きれいに済ませました。刈草は堆肥化しました。そうした甲斐があつて秋にはとびきり美味しい銀舍利の夕御飯を頂くことができました。「翌日には肌がすべすべになる」と皆が言いました。

我が家の水田で最も広い「五十刈」と呼んだ田は南に面し、終日日照があり、風通しもよく比較的高い収量がありました。ところが昭和30年代半ばになると、どこから持ち込まれたかヒロモ(多年生雑草、ヒルムシロ)が拡がりました。寒冷地の湿田という条件が生育に適していたのでしょう。毎年耕起後、代掻き後、そして田植え後も水田に這いつくばるようにして、カニの爪のような形の鱗茎や茎葉の除去に努めました。一向に減りません。稲は生気をなくして収量が激減しました。父は「里(平場)の水田に比べて何倍も苦勞するのに、さらにこの草では

もう作るのを諦めようかと思うが、それでは難儀して水田を拓いた先祖様に申し訳が立たない」と苦悶しておりました。

そうしたなか、救世主が現れました。市販もないゲザガード(プロメトリン)によって数年でヒロモがすっかり姿を消し、稲が再び元気を取り戻したのです。父は科学技術の進歩に驚嘆し、絶賛しました。俄然農業に力が入って、その後棚田の耕作者が減る中30年以上、90歳を越えるまで除草剤に助けられながら耕作しました。幸いなことに、この水田は今も縁者によって守り続けられています。

父からプロメトリンの朗報を得た頃、私は除草剤研究の先達、竹松哲夫先生の門下生に加えて頂いたばかりでした。プロメトリンの生理作用は竹松研究室で早い時代に解明されていたと後日伺いました。先生から絶えず「現場に学べ」、「現場に生かせ」、「雑草と遊んではいけない」と諭されました。

それから半世紀になります。私は少しも成長することなく門前の小僧のままでしたが、除草剤科学は著しい進歩を遂げました。最近、「除草剤ほど効果が確実で、経済効果の大きいものはなく、農家、農業を支える大黒柱」との思いを一層強くするばかりです。除草剤は農家を元気にする資材でもあります。農耕地は時に大きな生物学的、物理的ストレスを受けますが、生物学的ストレスには耕種的、あるいは作物自身の体力だけでは回避できないものもあります。このときこそ至適農業を上手く活用することです。将来は物理的ストレス回避のための「ストレス軽減剤(生育調節剤)」の登場も大いに期待されます。農家、農村が元気になり、そして日本が元気になる時代の到来を切望しております。